

<研究ノート>

日本語の支援が必要な児童を対象とした 日本語教育実習の試み

金久保紀子*・亀田 千里*・小野寺志津**

Japanese Practice Teaching with Foreign Children

KANAKUBO Noriko *, KAMEDA Chisato * and ONODERA Shizu **

Abstract

There is a Japanese teacher training course at Tsukuba-Gakuin University. This is a report about our first experience of practice teaching with foreign children who need Japanese support. Tsukuba city is famous for having many foreign residences. We discuss how we do for these foreign residences, especially children through our Japanese practice teaching.

キーワード：日本語教育実習 外国人児童 日本語支援 地域交流

1. はじめに

筑波学院大学には日本語教師養成のコースがあり、コースの仕上げとして日本語教育実習を4年次に行うことになっている。日本語教育実習は、それまで培ってきた日本語教育や日本語そのものに関する知識を、現場での経験を持たせることでより活性化すると共に、将来日本語教師を職業として選択するかどうかという重要な情報を提供する場になっている。

例年の本学における日本語教育実習は、台湾からの大学生を対象に行ったり、近隣在住

の成人日本語学習者を対象に行ってきた¹⁾。しかし、今年度は

- ・「日本語教育実習」を履修する学生（以下：実習生）が35名と、例年の倍以上いたこと
- ・中国語圏留学生、韓国の留学生、日本人学生がほぼ3分の1ずつおり、バランスを取る必要があった
- ・ボランティア活動などで年少者を対象にした日本語教育活動に携わっている学生が多かった

といった理由から、日本語教育実習を3期に分けて実施することとし、特に3期には年少者（小学校児童）を対象とした実習を初めて

* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

** 国際学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

実施することとした。

1期は、本学が協定を結んでいる韓国の誠信女子大学の学生を対象に、主に日本文化や生活について、日本語を使って説明することを主眼とした実習を行った。2期は、近隣在住の初級学習者を対象に、初級の会話を重視した活動を行った。

本稿は、3期に実施した日本語の支援が必要な児童を対象とした日本語教育実習について、実際に実習を管理し、実習生を指導する立場から見た実習の総括と問題点を、学生からのレポートも交えて報告する。今後の教育実習のあり方、さらにはこの実習が外国人児童の日本語支援にどのように寄与できるのかという可能性について検討を行うことを目的としている。

児童を対象とした日本語教育は、地域の母親を中心とするボランティアグループが担っていたり、センター校と言われる中心的な役割を持つ小学校が行ったりと、地域の事情により様々な取り組みがなされている。今後ますます増えることが予想される外国人児童をどのように支援するのかは、どの地域でも大きな問題の一つとなっていることは間違いない。児童だけではなく、義務教育である中学校にも外国人生徒が増えることは避けられない状況であろう。

筑波学院大学には日本語教師養成コースと中学校・高校の教員免許取得過程が用意されている。中学校の教員を養成の際にも、ある程度日本語教育にも対応できるように考慮することは必要ではないのか、このような点も視野に入れつつ検討を行う。

2. 日本語教育実習の概要

日本語教育実習は、4年生を対象に2単位を与える授業である。

実習の概要は次の通りである。

日程：2005年8月22日（月）～26日（金）

午前9時～12時半

ただし、8月26日は午後3時まで

実習時間合計 20時間×2クラス

実習生：11名

（日本人6名、韓国語母語話者2名、中国語母語話者3名）

対象者：つくば市内市立小学校に通う日本語支援が必要な児童

クラス編成：4月に入学・転入していた児童5名と7月に来日した児童2名を分ける。ただし、4月入学・転入児童のうち、1年2年の男子2名は、別の活動を行う場合もあった。

授業形態：各授業を50分とし、中心的に進める実習生1名とサポートする学生（主に媒介語が使える留学生）が複数でクラスに入る形態

今回の実習を進めるに当たり、事前に実習生と話し合い、指導の方針をいくつか設定した。

1) 8月末という時期を考慮し、9月からの各小学校での活動へのスムーズな移行を意識すること（9月中旬にある運動会などの行事を意識すること）

2) 各学年の段階を越えた能力を要求しないよう、内容を考慮すること、特に各教科の内容が理解できないと取り組めないような日本語の課題は避けること。

3) 学年を越えた活動、日本人児童との交流などを通して、幅広い人間関係を、日本語を通して経験させること

4) 実習生は、先生という立場ではなく、日本語支援を行う協力者（身近なお姉さん）という立場で接するよう心がける。

5) 媒介語の使用には特に制限を設けず、参加する外国人児童の理解と発話を促すことに重点をおいて指導にあたる。

6) 小学校でも行う朝の会・帰りの会・掃除などを共同で体験し、日本語での集団生活に慣れるようにする。

3. 準備の様子

学習者としての外国人児童の確保

準備の段階で一番問題であったのは、どのように日本語支援の必要な児童を探し、大学に招くか、という点であった。

表1 対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	5年	計
韓国人	男1	男1		女1	女1	男2女1
中国人			女1	男1女1		男1女2
計	男1	男1	女1	男1女2	女1	男3女4

網掛けの部分のみ2005年7月来日 それ以外は2005年4月来日

表2 第3期日本語教育実習 日程のあらまし

日 時	内 容		場 所	備 考
	入門クラス	4月入学クラス		
8/22月 9:00 12:30	朝の会 自己紹介 教室用語 天気表現 歌 帰りの会	朝の会 自己紹介 文字チェック 母国紹介 歌 帰りの会	学内教室	日直を決める(全体・クラスごと)そうじをする
8/23火 9:00 12:30	朝の会 数の表現 教室用語 学内宝探し そうじ 帰りの会	朝の会 道案内 数・助数詞 学内宝探し 帰りの会	学内教室	
8/24水 9:00 12:30	朝の会 年月日の表現 形容詞を使った表現 図工 そうじ 帰りの会	朝の会 昆虫・植物観察 物語を読む 図工 帰りの会	学内教室 松見公園	はさみなど使用
8/25木 9:00 12:30	朝の会 体・病気の表現 体を使った活動 そうじ 帰りの会	朝の会 書道 体を使った活動 帰りの会	学内教室 体育館	体操服に着替えて、走る、投げるなどの運動を行う
8/26金 9:00 15:00	朝の会 ミニ運動会 お楽しみ会 修了式		体育館 食堂 学内教室	習った日本語を総合的に使う日本人の子供たちと交流を行う

1時間の授業を45分で設定し、休み時間を設けた。

朝の会の内容は、実際の小学校で利用している一般的な内容とした。

親との連絡用に、連絡帳を準備し、緊急の場合の連絡などにも対応した。

児童には、傷害保険をかけ、万が一の場合の事故にも対応できるように配慮した。

大学が行う活動であるとはいえ、児童の所属が小学校にある以上、問題があっては困るという判断から、つくば市教育委員会に出向き、内容を説明した上で、協力を得ることとした。今まで教育委員会は、小学校で行われている日本語支援活動に大学生を送った経験はあるが、ある程度の外国人児童を大学の方へ送るといことはしたことがなかった。実習生の方が小学校に出向くというスタイルにすれば、実現しやすい環境があるようにも考えられたが、今回は初回であったことから実習生が複数の場所に散らばって実習を行うことを避けたかった。

その後、教育委員会の紹介で、大学から至近距離にあるつくば市立の小学校に協力を要請した。幸い、教頭や日本語支援担当教諭の賛同を得ることで、学習者である外国人児童の確保についての目処が着いた。その他、本学に関係する外国人の子供たちも参加することになった。

夏休み中に来日し、突然9月から小学校に転入する児童もいることが予想されるが、7月末の時点では、各小学校や教育委員会では、どのような児童が9月から各学校に転入するのか、まったく掴めないということが明らかになった。突然受け入れを求める外国人児童の対応は、受け入れ小学校にとってかなりの負担になる場合もあると考えられた。

実習生の準備状況

実習生の中には、何らかの形で子供たちと接触を持ったことがある学生が多いた²⁾。けれども「日本語を教える」を主眼に活動を行った経験は決して多くはなく、特に小学校の各学年でどの程度のことが理解できるのかについて想像することが難しかった。子供向け番組の視聴したり、日常の中で子供たちを観察したりするよう指導をした。

一方、留学生たちは、媒介語の使用のタイミング、また子供らしい日本語の使い方への

慣れないことを不安に思う傾向が強かった。韓国留学を経験している日本人学生にも、媒介語として利用できる韓国語が子供たちに通じるのか、という不安があったことが学生のレポートからうかがえる。

実習の準備は、5月中旬から開始したが、本格的な学習者を想定しての準備は7月後半になってからとなった。実施期間の設定に当たっては、1) 児童の小学校に支障がない時期、2) 実習生の夏休み期間中に、などを考慮した。しかし、今まで経験のない学習者である児童を対象にしたこと、実習生たちが夏休み期間中に実習を行う予定を組んだことで、より準備のしにくい状況になったことは否めない。

実際の準備は、児童への日本語教育経験者を中心にした実習生が内容を検討する担当となり、それ以外の実習生が学習環境を整える担当となり進めることとした。

学習の環境整備

児童向けの環境、特に安全面に配慮した環境・休み時間でも楽しめる環境を整えることに重点をおいて整備を行った。

児童が実際に生活をする小学校や児童館を参考に教室やお手洗いなどに手を加えることにした。

< 教室 >

- ・絨毯敷きの教室だったので、上履きに履き替えるようにし、下駄箱を設置
- ・教室活動がしやすいよう、余分な机・椅子は排除し、大きく使えるスペースを確保
- ・休み時間に交流ができるよう、ボールや日本の昔遊び(剣玉・簡単な竹馬など)・絵本を用意
- ・小学校にもあるような当番表・日直・朝の会・帰りの会のプログラムなどを壁に貼る
- ・子供たちが自由に絵が描けるようなスペースを作る

< 教室外 >

- ・よく利用するお手洗いは「手を洗おう」「トイレはこちら」などの掲示物を子供向けで作成し、貼る
- ・大学側には外国人児童が出入りすることを周知し、名札をつけることを条件に自由に大学内を回れるように配慮

参加した外国人児童

大学近隣の小学校に協力を要請した結果、5名の児童が参加したいという応募があった。それぞれ児童は日本語に不安を感じる本人と親との希望により、応募してきたと考えられた。また、親が本学に来た折に実習のことを知り、申し込んできた姉弟2名いたので、合計7名の児童が集まった。

実習を始める前に児童たちの様子を知ることが必要であるという判断から、実習1週間前に説明会を実施し、個別の家族に会えるよう手配した。

その結果、4月から小学校に入学・転入した二組の姉弟は、低学年である弟側は大きな問題を抱えているようには見えず、実際本人も小学校を楽しんでいる様子であった。一方、4、5年生である姉は日本語以外のことは何ら問題がないのに、日本語ができないという理由だけで特別扱いされたり、小学校でのさまざまな活動に思うように参加できないことを意識し、楽しいけれど、複雑な気持ちを小学校に対して感じていることがわかった。親もそのことに気づき、特に姉のためにもう少し日本語をどうにかしたい、という希望を持っていることが明らかになった。

7月に来日したばかりで、実質的に日本の小学校での経験を何も持っていない兄妹は、ひらがなを読むのがやっとという状態であった。日中二人でテレビを見ながら、何となく日本語に触れるようにしている程度で、系統だった日本語教育を受けたことはなかった。日本は楽しそうだが、どう振る舞えばよいのかまだわからない、という雰囲気であった。

4. 活動の様子

実際の活動は、思いがけない反応をする児童や、集中する活動とそうでない活動などが様々で、成人相手の実習のように、準備してきた教案を消化するようにはいかない、ということはある程度予想ができた。ここでは、従来の成人対象の実習と大きく異なった特徴ある活動や内容を取り上げ、報告する。

1) ゲームの多用

集中力が長くは続かない児童が対象であるので、授業中での活動は自然とゲーム性を重視した内容となった。

カードを利用したゲーム

成人の場合も使うことがあるが、単純なカードを利用したゲームは外国人児童たちの興味をすぐに引き、集中できる内容となることが多かった。

特に、1日目にウォーミングアップ的に実施した名詞などの語彙確認のカルタは、クラスの雰囲気作りにも大変役立った。カードをテンポよく取らせ、かつスムーズに取れなかったカードの確認を要所所所に入れる工夫を施すことで、ゲームの中にメリハリが生まれ、外国人児童の集中力を引き伸ばすことができていた。語彙のレベル確認としても有効であった。

キャラクターの利用

ゲームの中の質問や、ご褒美に子供たちに人気のあるキャラクターを利用することは、やる気を喚起するには大変効果的だった。特にゲームの勝者や課題達成者に与えられるシールを豊富に準備し、外国人児童に選ばせる方法は、大変好評だった。

身体的な活動を伴うゲーム

教室内での宝探しゲームは、いすに座ってばかりになりがちな授業を活性化するよい活動であった。見つけたカードを自分のノート³⁾に貼ることでさらに自分自身の活動とい

う意識が持て、盛り上がる活動となった。全部の外国人児童で行った大学構内の宝探しゲームも、学年や日本語のレベルを超えて取り組めた。準備には手間がかかるが、達成感を得やすい活動であるといえるだろう。

ゲームとはいえないが、運動会を意識した動作をあらゆる動詞や、身体部位の名称を導入する活動を体育館で行った。場所が変わったことで、興奮し、コントロールするのが難しいという問題もあったが、外国人児童の評価は高かった。

2) 創作的な活動・文化的な活動

外国人児童たちは、日本語を使って何かを創作するという活動に、驚くような集中力を発揮した。紙粘土と空き缶を利用した置物を作るという活動を取り入れた。実際は女の子ばかりだったことも関係している可能性はあるが、自分の好きなように物を作りながら、「どこにありますか?」や「これは難しい」などの日本語を交えて活動を行うことができた。

また日本の昔話である「桃太郎」を扱う授業もあった。成人に対して行うような読解教材としてではなく、身近に日本の昔話を感じてもらえるよう、「きび団子投げゲーム」なども取り入れ、また自然に「おじいさん」「おばあさん」などの語彙もわかるような構成だった。子供に絵本を読むような感覚で、臨場感を大切に話した話し方も効果的であった。

3) ミニ運動会・お楽しみ会

最終日に総合的に日本語を使えるように、という目的でミニ運動会を実施した。同じような学年構成の日本人児童も招き、総勢14名でのミニ運動会であった。日本の典型的な運動会を知ってもらうこと、特に9月中に実施される小学校での運動会の予行となるようプログラムも工夫された。「パン食い競争」「障害物競走」「玉いれ」「ダンス」「リレー」などを実施した。

体育館のアリーナで実施したが、夏季だっ

たので暑さに対する対策、参加者たちに聞こえるような音響の対策、ルールのわかりやすさへの工夫(線引きなど)準備する内容は多岐にわたった。主な目的だった日本語の使用は、期待されたほどではなかったかもしれない。子供たちは体を動かすことに集中し、日本語を使うことをあまり意識できていなかった。また、日本人児童との交流も、話をするような機会を特に設けていなかったことから、さほど活発ではなかった。

ミニ運動会后、場所を食堂に移して、「お楽しみ会」が実施された。屋台風におにぎり屋や焼きそば屋などを配し、食券を利用することで、日本語使用の機会を増やすことに成功した。お祭りで見かけるようなヨーヨーつりやカキ氷なども準備され、最終日の最後の時間の過ごし方としては非常に楽しげなものとなった。

このような行事を実習に盛り込むことは、参加する外国人児童にもよい機会を与えることはもちろんのこと、企画・運営をする実習生にとってもよい経験の場となる。多様な状況を想定し、準備を進め、実施することは、ひとつの授業を担当することとはまた違った観点から学習者を見、その様子をその後の授業に役立てることができると考えるからである。どのような教育機関で教えるにせよ、日本語教師を養成するにあたり、このような行事をスムーズに運営する力を身につけることは非常に重要であると改めて感じた。

5. 実習生のレポートからわかること

実習生は、5日間の期間中ほぼ全員が毎日参加し、何らかの活動に関わってきた。実習生の最終レポートから、特徴的に見られた感想・意見についてまとめる。

外国人児童の表情の変化について

数年の日本語教育実習レポートを見直してみても、実習の対象者の表情の変化について

これほど記述が多い年はない。

「2日目、2日目と朝のあいさつ、帰りのあいさつの声がどんどん大きくなり、自分から「おはようございます」「さようなら」と言えるようになっていった。Aさんは(中略)笑顔を見せることもできた。B君は(中略)キャッチボールを通じて笑顔を見せるようになり、ボールが当たってしまった時に「ごめんなさい」と言えるようにもなった。」(実習生 T.K. レポートより)

「やはり表情を表に出さなかったのは、分からない日本語の不安を自信の無さからきているものだと、この時初めて理解することができました。」(実習生 A.N. レポートより)

成人の学習者より年少者の方が、表情を読み取りやすいと言えるが、何より実習生の意識が外国児童が発するあらゆるものに及んでいて、特にわかりやすい表情から理解度や満足度を測ろうとしていた結果であると考えられる。

留学生による母語の使用について

媒介語の使用は、教育機関の条件や日本語教員の資質により、左右されることが多く、媒介語の使用が必ずよいとも悪いとも言えないと一般的に考えられている。今回は、準備の段階から、媒介語を上手に利用し外国人児童をリラックスさせ、日本語を楽しんでもらおう、という認識を持っていた。授業の主な指導を留学生が行い、媒介語を大いに利用する場合もあったし、日本人学生が授業を担当し、留学生がより日本語力が弱い外国人児童のサポートのみを行う場合もあった。

最終レポートでも、外国人児童の様子と媒介語の使用に関する記述が多く見られた。

「～とても活発な行動に驚かされました。二人共とてもリラックスして授業を受けていました。どれだけ日本で日本人と日本語を勉強することが子供にとって、緊

張し不安だったのか理解することができませんでした。」(実習生 A.N. レポートより)

「～笑顔も見せてくれた。休み時間に二人が、用意した日本のおもちゃなどに夢中になって、自然に中国語で私たちと会話するようになった。少し信用されたような気がした。」(実習生 E.R. レポートより)

今までの形態の実習では、媒介語を使わないように、あるいは使っても最小限にするように、という指導を基本的にしてきた。しかし、今回の場合、使用しなかったら効果的な指導を短期間にするのは困難であったし、何より学習者である外国人児童には何らメリットがなかったように感じる。

一方で、一人の児童は英国での居住経験があり、英語が話せた。英語が話せる実習生がいることがわかると、しばらくの間英語で話しかけてきて、日本語を話そうとしなかったという報告もあった。

留学生の日本語教員養成へのヒント

留学生を、日本で日本語教員として養成する場合、自分の母国の子供たちに日本語を教えるチャンスを持つことは非常に意味のあることがわかった。

「～彼が日本語で話したいという気持ちになったと考える。「これは日本語でなんと呼びますか」という質問を中国語で出した。「よかった」と思った」(実習生 I.O. レポートより)

自分の日本語力や指導力がたとえ未熟であっても、留学生である自分が外国人児童の学習に役立つことを経験したという充実感がレポートから伺える。子供には成人より余計なことを考えずに気軽に接することができ、子供の反応から素直に自分のしたことの成果を感じられたことが留学生の達成感をさらに深めていると考えられる。

一方で、外国語である日本語の指導を、日本人学生と一緒にすることは大変な精神的ブ

レッシャーを感じる作業あることは容易に想像できる。

「他の先生はみんな日本人だが、自分は外国人だから日本語を教えることになって、「日本人と比べられるのかな、ついていけなかったらどうしよう」「子供を教えるとき、文法を間違えたりしたらどうしよう、(中略)実習をどんどん進めながらお互いに悩み事やいろんな準備や問題などをみんな考えてくれたり、助けてもらったりしながら、団結ということばを身をもって知ることができたと思う」(実習生 Y.C. レポートより)

「はじめのときに他人の意見を聞くばかりだったが、段々自分の意見が出せるようになったと感じている(中略)どんなことでも事前の練習と皆との協調はすごく役に立つ。(中略)今回の実習は人と協調することの重要性を知ることができた」(実習生 A.S. レポートより)

学部で留学している留学生にとって、日本人学生と同じ作業を協力して行うチャンスは、案外多くないことがうかがえる。実習になって初めて一緒に何かを作るという経験をし、留学生活そのものや、日本人学生との関係を見直す契機になっていると考えられる。このことから、留学生を日本人学生と切り離して教師養成の場に出す、たとえば母国での実習を課す、などの方法が有効ではないことが言えると思われる。

その他

実習の準備段階から明らかであったが、日程の問題で準備期間が十分に確保することができず、準備不足を指摘する声が多かった。

また、予想できない外国人児童の反応に、実習生が適切に対応できなかったことを反省する内容も多かった。しかし、児童の指導は、たとえ経験豊富な教諭であっても難しい場合がある。

児童を指導するからこその特徴であると思われたのは、いすにずっと座っていない場合の対応、また過度に興奮してしまい、やるべき内容に集中できない場合の対応についてである。作業を達成するために、ご褒美(好きなシールをあげる、など)を工夫し、いすに座っていない場合はその褒美が得られないという状況を作るという方法をとっていた学生もいた。このような児童を指導する上でのテクニックはすでに小学校教育の分野で蓄積があるはずであるから、日本語教育に応用していくことが必要であろう。

6. まとめ

今回の実習では、今までにない対象者を得て、実習生・指導者双方が有意義な経験をすることができたと総括することができる。しかし、参加した外国人児童にとってはどうであったか。

確かに外国人児童の授業評価を見ても、総じて評価が高く、活動や日本語にマイナスの印象を持って返った外国人児童はいなかったように思えるが、それは実習期間中のことで、その後、今回の活動がどのように役だったかについての確かめができていない。外国人児童の親から見ても、一時期の日本語の駆け込み塾のように利用し、児童が満足していれば、それで価値があったように感じているだけかもしれない。

一方で、外国人児童たちの今後を考えてみると、母語が分かる教員がいない状況になり、また多くの日本人児童と同じ30人規模の教室で学習することになる。おそらく、こちらの日本語授業は楽しかった、分かる言葉で話してくれる先生がいた、などと比較がはじまるであろう。小学校の日本語担当者からみても、今回の実習の状況は非常に贅沢な場であり、小学校に同じような場を設けることは非常に困難だと考えられる。

最後に、今回のような児童と対象にした日本語支援の活動はどのようにすればより有意義な活動になるかを検討してみる。

一つには、大学が持つ人的資源を小学校で利用することが考えられる。今回確認できた留学生による外国人児童の支援の有効性は、小学校でも活用されるべきである。それも、留学生単独ではなく、外国人児童の課題をよく知る支援者と協同で日本語指導にあたるのが、重要だと思われる。留学生にとって、日本で母国の児童に教える経験は、留学生生活そのものを豊かにする経験となるばかりか、その後の日本語教師としてのキャリアにも良い影響を与える。もちろん、日本人学生を支援の場に活用することで、身近で遊んでくれる年上の日本人として、外国人児童の日本語使用場面をさらに広げることができるであろう。

もう一つは、すでに整った支援体制を大学が利用するという方法である。本学が中学校教員免許過程を持っていることを勘案すると、将来、日本で中学校教員になろうという学生は、日本語支援活動に関わった経験を持つべきであると提案できる。つまり、今後の日本の中学校では、外国人生徒がいないという状況は考えにくく、どのような教科を教える教員であれ、外国人生徒の支援に関わらなければならないからである。すでに整った体制に、教育実習という形態ではなくても、参入し、活動に参加することは、学生たちにとっては大変有意義である。

つくば市には、留学や研究関係で来日した家族が多く、親の就労状況が子供の教育環境に悪影響を与えるケースは少ないが、日本各地では、親の労働環境により来日したり帰国したりを繰り返すケースが多いことが報告されている。すでに土屋（2005）にも報告があるように、そのような状況で振り回される子供たちの環境を改善するために、大学が継続して活動に関わることも今後は必要である

う。

一時の日本語教育実習という形態ではなく、ある程度継続して、かつ既存の日本語支援の体制との連携を上手にとれるかどうかが、大きな課題である。

注

- 1) 詳細は、金久保（2000）（2000）、金久保・亀田・塚原（2002）、亀田・金久保（2003）
- 2) 3期実習生で、児童や幼児の指導に関わる経験者の内訳は次の通りである。
児童対象日本語支援経験者：日本人4名
つくば市内児童館ケアワーカー経験者：日本人1名
幼稚園教員経験者：中国語母語話者2名
- 3) A4サイズのスケッチブックを用意し、活動で使用したプリント類はそこに貼るようにした。プリント類が散逸しないこと、前の活動を振り返りやすいことなどが特長である。小学校では低学年で特によく利用される方法。

付 記

本論で使用した実習生の最終レポートの引用は本人の承諾を得て行っている。この場を借りて、今回の実習を行うに当たりお世話になった、外国人児童、家族の方々、関係機関の先生方に深くお礼を申し上げる。

参考文献

- 金久保紀子（2000）「副専攻日本語教員養成コースにおける日本語教育実習のあり方」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第4集 pp143-153東京家政学院筑波女子大学
- 金久保紀子（2001）「第2回日本語教育実習の報告」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第5集 pp117-123 東京家政学院筑波女子大学
- 金久保紀子・亀田千里・塚原真紀（2002）「日本語教育実習報告 - 日本人学生と台湾人大学生とのディスカッション活動を中心に - 」『東京家

- 政学院筑波女子大学紀要』第6集 pp145-152 東京家政学院筑波女子大学
- 亀田千里・金久保紀子(2003)「日本語教育実習の改善を目指して」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第7集 pp105-113 東京家政学院筑波女子大学
- つくばインターナショナルグループ学校部(2003)『Welcome to 日本語教室 - 外国からきた子どもたちに日本語を教えるボランティア』明石書店
- 土屋千尋(2005)『つたえあう日本語教育実習 - 外国人集住地域でのこころみ』明石書店